



<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」

Ver.2-012 号

「良心碑」を巡って



同志社大学通信「One purpose」195号(2018. July)は、「良心教育」を特集していた。



その冒頭に「良心教育」は新島襄の最晩年の手紙の一節「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起  
り来ラン事ヲ」に由来する。」と書かれている。

これは「良心碑」に刻まれている言葉で何度も耳にし、引用され、目にしてきている。

しかし、「良心碑」が建てられた背景及びその言葉が何故、選ばれたのかについては、今までほ  
とんど触れられていない。そのことについて沖田行司先生が「One purpose」の特集で説明されて  
いた。今号では、このことに焦点を当てた。

なお、沖田先生からは「One purpose」でのご発言の他にも情報をいただき、感謝しています。

沖田 行司 (オキタ ユクジ) 先生について



部署:社会学部教育文化学科 職名:博士後期課程教授 教育文化学会 会長

受賞:1995年新島論文賞

著書:『新編・同志社の思想家たち』(上) 晃洋書房 2018年

『日本国民をつくった教育—寺子屋からGHQの占領教育政策まで』

ミネルヴァ書房 2017年

『日本人をつくった教育—寺子屋・私塾・藩校』大巧社 2000年

『ハワイ日系移民の教育史—日米文化、その出会いと相剋—』ミネルヴァ書房 1997年

『日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』日本図書センター 1992年

所属学会:教育史学会, 教育文化学会, 日本思想史学会

以上

## 【 目次 】

1. なぜ、「良心碑」が建てられたのか？ 建立の時代背景
2. 「良心碑」に刻まれたキーワードはどのように選ばれたのか？ その経緯
3. 「良心を手腕に運用する」という下りはどこから？ その出典
4. 新島襄が使った「良心」の意味はどのような意味だったのか？
5. 横井小楠はどこで「良心」を使っているのか？
6. 横井小楠の『中興の立志七条』の内容
7. 横井小楠「遺表」とは？
8. 横井小楠はなぜ、新政府から招命されたのか？
9. 明治天皇の即位について
10. 『遺表』の読み方

.....

### 1. なぜ、「良心碑」が建てられたのか？ 建立の時代背景

「今出川校地に新島襄永眠 50 周年の記念事業として「良心碑」が建立されたのは 1940 年です。当時は軍国主義が日本を席卷していた時期で、軍部から圧力を受けていた。

## 2. 「良心碑」に刻まれたキーワードはどうして選ばれたのか？ その経緯

本学のキリスト教主義は時代にそぐわないものとされ、キリスト教を超えた文言が求められた。そこで徳富蘇峰は「良心」を選んだ。理由は横井小楠が明治天皇の教育に当たった時の理念であるので、軍部から批判はできないという考えから思いついたといわれている。(湯浅八郎談)そして、新島襄の晩年の手紙の一節「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」から「良心」が選ばれ、刻まれた。

## 3. 「良心を手腕に運用する」という下りはどこから？ その出典

一方、「同志社大学設立の旨意」で良心教育が主張される3年前、徳富蘇峰は『第十九世紀日本の青年及び其教育』の中で「かのクロムエルが所謂良心を手腕に運用するが如き」という表現を用いている。この書物の跋文を新島先生が書いている。

## 4. 新島襄が使った「良心」の意味はどのような意味だったのか？

「神と共に知る」(コンシエンス)の訳語が「良心」とされていますが、新島先生がこの意味で使用したというのは、後付けの論で確証はありません。横田安止にあてた手紙の文章は徳富が探し出したと言われていますが、その時の良心の意味は能くわかりません。

このように「良心碑」は同志社がキリスト教主義教育を行っているということを守る意味で建立されたもので、明らかに横井小楠の系譜を意味するものと思われます。

しかし、新島襄にとって良心はキリスト教と一体的なものなので、その視点から見れば、良心碑はキリスト教主義とつながっています。

## 5. 小楠はどこで「良心」を使っているのか？ 「One purpose」の記事より

沖田:「良心」という言葉には、もう一つの大きな流れがあります。その歴史は1869年に遡ることができます。岩倉具視の依頼を受けた熊本藩の横井小楠が幼年の明治天皇のために著述した『中興の立志七条』で宮中の古い伝統は「良心」を滅ぼすと指摘し、天皇が反戦の立場に立てば、自然と「良心」が発すると述べています。

さらに天皇宛の遺言『遺表』にも「良心」の大切さを記しています。小楠は「良心」を「道」または「誠」と解説しています。これは徳富蘇峰の父の一敬らが受け継ぎ、海老名弾正が永らく保管してきました。」

## 6. 横井小楠著『中興の立志七条』の内容 (『横井小楠遺篇』より)

- 1 条 中興の立志今日に在り。今日立つこと阿多はず、立たんことを他日に求む。  
    豈此の理あらんや。
- 2 条 皇天を敬して祖先に事ふ。本に報ずるの大孝なり。

- 3 条 万乗の尊を屈し匹夫の卑に降る。人情を察し知識を明にする。
- 4 条 習気を去らざれば良心亡ぶ。虚礼虚聞、此心の仇敵にあらざらんや。
- 5 条 矯怠の心あれば事業を勉ることあたはず。事業を勉めずして何をか我霊台を磨かんや。
- 6 条 忠言必ず逆ひ、巧言必ず順ふ。此間痛く猛省し私心を去らずんばあるべからず。
- 7 条 戦争の惨憺万民の疲弊、之を思ひ又思ひ、更に見聞に求めば自然に良心を発すべし。

小楠は、「中興の立志七条」で「習気を去らざれば良心亡ぶ。虚礼虚聞、此心の仇敵にあらざらんや」と述べたように、「虚礼・虚聞」は「良心の発顕」を阻むものである、と捉えている

## 7. 横井小楠「遺表」とは？

明治天皇宛の遺言として弟子に口実筆記させたもの。(1868 年夏)4 条あるが「良心」に関する第一条のみ掲載

### 第一条

人の良心は道の本なり。この良心時として無不発。人能依而行、是則道なり。誠なり。誠ならざれば人を動かし物を動かすこと能はざるなり。人主民を愛して政を施して政を施し順を賞し、逆を罰す、皆この心に基づく。天下服する所以なり。天命を奉じて天下を治むる、他になし、この良心に従ってこれを行ふのみ。然らずして、ただ富強の事に従ふは覇者の術なり。西洋各国を視るに、その尊ぶところ耶蘇を以て宗とし、道は人の良心に基づくことを知らず、その政令の出づるところ、人事の行はるところ、ただ利害の一途に出で倫理綱常を廃棄し、刻剥を極はめて、我の欲を成すに到る、実に宇内の大患なり。独り本朝は未だこの害を蒙らず、たまたま仏教行はるといへども皆愚婦愚夫上の事にして、士大夫以上これを信ずる者すくなし。この時に当って、皇上能くこの心推して政を施したまはば、人心自然に王路に帰し、大道始めて分明なるべし。実に本朝の幸のみならず、宇内の大幸に御座候。

(西郷隆盛や吉井友實などが高く評価している。「遺表」は横井小楠の娘婿の海老名弾正が保管し、もちろん小楠の高弟の徳富一敬なども熟知するところであった。)

\* 上記の6. 7. は、沖田先生が、2017.11.17 に「同志社建学の精神 — 創立 150 周年とその先を見据えて —」を講演されたときの資料です。

.....

\* 補足情報 \*

## 8. 横井小楠はなぜ、新政府から招命されたのか

昭和時代の日本史学者・圭室諦乗(たまむろ-たいじょう 1902-1966)先生は、日本歴史学会編『横井小楠』の冒頭に次のように書かれている。

この頃の日本は、嵐の時代であった。二百数十年の間、安易にあぐらをかきつづけてきた幕藩体制もいよいよ限界にきて、必然的に自壊作用がおこり、同時に体質改善が真剣に考えられはじめ、日本の社会は大きくゆれにゆれた。一方、国際政局の高波も日本だけを避けてはくれない。まさに日本歴史にとって最大の受難期であった。とされている。

「横井小楠は幕末維新の日本が生んだ最高の思想家・政治家である。流動する世界、変転きわまりない日本、こうした内外の危機に、世界史的視野に立って新しい日本の進むべき方向を明示したのは、佐久間象山と横井小楠であった。

小楠の卓絶した思想の一端は、小楠の高弟由利公正の草案になる「五箇条御誓文」に流れる傑出した思想は、小楠の思想が投影されていると言われる。その識見は断然時流を抜くものであり、一貫して庶民の幸福を守る立場に立ち、しかも開国論を唱えるものであった。

一方、このような小楠の思想に対して、頑迷に封建秩序を固執する肥後藩庁の主流派と、ことごとに対立。五年間、藩庁はかれから士道を剥奪、ある寒村に蟄居させた。

明治新政府は、日本の現実をふまえると、世界的視野をもつ最高の知囊横井小楠を絶対に必要とした。しかし、肥後藩庁は新政府の小楠召命をも妨害したが、岩倉具視の一喝で、小楠を士席に復し、その出仕を承諾せざるをえなかった。かくて明治元年四月、新政府の参与に召出された小楠は、岩倉具視の絶大な信頼をえて、はじめてそのすぐれた経綸を行なうこととなった。

\* 今回の話に登場する小楠は、60歳前後の小楠である。

## 9. 明治天皇の即位について

明治天皇の父である孝明天皇が崩御したのは、慶応2年12月25日(1867年1月30日)。明治天皇は慶応3年1月9日(同2月13日)、満14歳で踐祚の義を行い、皇位に即く。慶応4年1月15日(1868年2月8日)元服。慶応4年8月27日(1868年10月12日)、京都御所にて即位の礼を執り行い、即位を内外に宣下した。満17歳のときであった。

## 10. 『遺表』の読み方

森藤一史大阪外大教授は、『横井小楠のすべて』(維新政権に参画 p.156~157)で

次のように述べている。

「良心」について小楠は、「遣表」第一条で、「人の良心は道の本」であり、「誠」である、と言っている。民に「仁政」を施すといっても、「慈愛の誠」によらないのであれば、それは「覇者の末術」にすぎない。それで「富国強兵」政策を行っても、それは「利害の私事」である。「王者が天意を受けて天下を治めるのは、ただこの良心に従って行う以外にはない」のである。

いかに「非常の御聡明」に恵まれた明治天皇といえども、女官が侍り「虚礼・虚聞」を初めとする旧来の宮廷に閉じ込められたままでは、「良心の発顕(あらわ・ほつげん)」、その「御聡明」を発揮して「天下の情を尽くすこと」はできない。

明治天皇が「非常の御方」として政治を「一新」して「慈愛の誠」に基づく「仁政」を行うために、宮廷改革は不可欠である。

このように宮廷改革を強く求める小楠の脳裏には、唐虞三代の理想の宮廷像があった、と思われる

そして小楠は、「天下の情を尽くす」ために「衆庶」に親しく接するようにせよ、と言う。

また、小楠は、明治天皇が「良心」を発顕して、「公平正明の御心」を養われ、「慈愛の誠」に基づいて、徳川幕府の「私営の政」を廃して、「利害の私事」に陥らない「公共の政」を実現することを願っていたのであろう。

.....

以上のことから同志社における「良心」や「良心教育」の基本的なことが更に明らかになった。これをベースに議論、探求し、実行。それを継続して同志社のブランドまで高めたいものです。

多田直彦 ■